ひょうたん塾通信

第８号

2013年2月号

【発行年月日】平成25年2月20日
【編集・発行】ひょっこりひょうたん塾 事務局

主催：ひょっこりひょうたん塾、大槌町、東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）、特定非営利活動法人いわて連携復興センター
※ 本事業は Art Support Tohoku-Tokyo（東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業）です。

© 井上ひさし／山元護久／ひとみ座／ NEP21 キャラクターデザイン：片岡昌

ひょっこりひょうたん塾は岩手県大槌町において、町民主体による住み良いまちづくりを進めるため、文化芸術を活用したソフト面の復興を考え、実践していくための人材育成事業です。

目次

■【レポート】２０１２年度まとめフォーラム　前編
■【参加者の声】川端伸哉さん　土橋綾菜さん　阿部智子さん
■【事例紹介】なんのためのアート（宮城県）
■【事務局日記】大槌でまじくること

【参加者の声】

大槌町社会福祉協議会
川端伸哉 さん

今回のセミナーは、『これからの大槌のまちを考える』というテーマで地元の活動団体や一般参加者がまじくる場に参加させていただきました。

現在、町内には様々な課題があります。『復興は進んでいるのか？町の形が見えてこない。防潮堤はいつできるのか？町に賑わいがない。』等、その大きな課題に挑戦するのは大槌町に住む一人一人です。これら大きな課題を解決しようと考えると『しりごみ』がちですが、行政、地域団体、町民、支援者が、それぞれの自分のできることの役割をもって、もしくは見出して活動していくことが重要と感じました。

これからも、多くの方と考え、関わりをもち、楽しみながら活動していきたいです。

土橋綾菜 さん

一般参加者は思った以上の人出で、講演に耳を傾け、合間には特設のお茶っこブースで談話し、楽しんで参加されているようだった。活動団体紹介ブースでは各団体の活動内容の展示があり、大槌に関わる団体がこんなにもいろいろあり、そして懸命に活動してくれていることを改めて知り力強く思った。

自分ひとりではなにもできない。しかし、少なくともこのフォーラムに集まった人たちの力が集まれば、わたしたちは前に進んでいけると思えた。

ひょっこりひょうたん塾 事務局
阿部智子

ひょっこりひょうたん塾のまとめフォーラムにふさわしく、大勢の皆さんにお集まりいただくことができ、とてもうれしい「場」となりました。そこに足を運ぶきっかけはそれぞれでも、その時その場に居合わせたことが【ご縁】の始まりになります。そこで出会い、交わした言葉で次につながる何かが生まれる。なので、人が参加してみたいなと思う「場」を創ることの大切さを感じています。ものを作ることの上手な人が多いので大槌の皆さんは「つくること」の楽しさを知っていると思います。きっと、〈まちづくり〉にもさまざまな想いを持っているのではと・・だからこそ、楽しく集いみんなで「創る場」として、ひょうたん塾が進んでいったらいいなと思います。

【事務局日記】

大槌でまじくること　（記　元持）

「大槌でまじくること」をテーマとして、ひょうたん塾まとめフォーラムがたくさんの方々のご協力のもと開催となりました。

フォーラムでは、今年度のひょうたん塾の活動、塾がきっかけで生まれたもの、人や情報のネットワークの活用などを確認できる場づくりをめざし、多くの参加者の皆さんの興味や関心事をもち、参加できる時間を設けてきました。

「まじくる」とは、地域や職業、年齢、社会的地位なども超えた対話ができる空間としての意味合いを持ちます。今回フォーラムを、どのように参加者は感じたでしょうか。会場には、たくさんの話し声や笑い声、時折涙などもみられていました。人々が足を運ぶ・集まる↓人が動く事。これからもその仕組みを考え、人々の動きがより良いまちづくりへとつながる事に期待しています。

【事例紹介】

なんのためのアート（宮城県）

東日本大震災以降、被災地では芸術文化に関わるさまざまな活動が展開されました。その活動の一部を共有するとともに、震災という非日常を契機に生じたこれらの動きが、日常へ向かう今後の復興過程でどのような継続性を持ちうるか？そもそも芸術文化には、どんな必要性や意義があるのだろう？試みの報告を聞きながら、集まった者同士で考え合う4時間半の場が開かれました。

【主催】宮城県、みやぎ県民文化創造の祭典実行委員会、東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）、えずこ芸術のまち創造実行委員会　【共催】せんだいメディアテーク
（引用）http://asttr.jp/project/nta.html

【ひょっこりひょうたん塾 事務局】
E メール：hyotanjuku@gmail.com
住所：〒028-1131 岩手県上閉伊郡大槌町大槌 24-24-2
電話：090-6229-4621

【ひょっこりひょうたん塾 ホームページ】
http://hyotanjuku.jimdo.com/

詳しいレポートやスケジュールなど、随時更新中 !!

2013年2月2日(土)

ひょっこりひょうたん塾 2012年度まとめフォーラム

「大槌町で《まじくる》こと ～お互いのいまを知り、これからの大槌のまちを考える～」

前編

今年度のひょっこりひょうたん塾最後の企画、「大槌町で《まじくる》こと～お互いのいまを知り、これからの大槌のまちを考える～」を中央公民館大会議室にて行いました。

ひょっこりひょうたん塾の2012年度のふりかえりをはじめ、町内で活動する団体の事例紹介と対談、ゲストの山口洋典さんのレクチャー、藤浩志さんと参加者との対話を2時間半にわたり行いました。また会場では、きむらとしろうじんじんさんと町民によるお茶会、大槌で活動する団体や大槌高校生による展示、大槌おもいで信用金庫（通信第6号参照）ブースでの懐かしい町中映像、音楽ライブなど、盛りだくさんの企画となりました。

まず最初に、主催である大槌町役場より高橋副町長、東京都より東京文化発信プロジェクト室の森氏からご挨拶。2011年11月から大槌町と東京都の共同により、ひょっこりひょうたん塾を作り上げてきました。これまで進められてきた基盤整備事業とは別に、町民の暮らしや生業などのソフトの復旧・復興のために、町民が主体となって話し合いや活動を進められるような場を設けてきました。そして今回のフォーラムも、みなさんの活動を言葉にし、目的などを共有することで大槌町のいまを知り、そしてこれからの大槌について語り合う場を目指して、大槌町と東京都が共同して企画しました。

「場」の重要性

第一部として、大槌町で活動する団体による事例紹介と対話を行いました。文化芸術まちづくりゼミの監修を務めてきたアサダさんの進行で、各団体の代表者にお話を伺いました。前半は、一般社団法人おらが大槌夢広場 代表の阿部敬一さん、大槌商工会青年部 若だんな会の芳賀光さん、特定非営利活動法人@リアス NPO サポートセンター 代表理事の鹿野順一さんの3名の方にご登壇いただきました。各々、思い出の写真などを見せていただきながら、設立の経緯や活動の内容をご紹介いただきました。話題となったのは、「場所の持つ力」です。おらが大槌夢広場さんは食堂を運営していますが、そこが再会の場となったり、夢を語り合う場になったりという機会が徐々に増えていったそうです。@リアスさんも「みんなの家」という場を運営しており、老若男女、地元の方やボランティアの方までいろんな人が集い、日常にとけ込んだ形で気軽に繋がれる場所として利用されています。商工会の芳賀さんは、若だんな会の集まりで、被災を逃れたところに集まったり、プレハブに集まったり、コピー機もないところに集まったりしたようですが、出身である吉里吉里への思いが強く、もっと地元をPRするような使い方をしたいと模索されています。場所があることによって起こるストーリーをどう発信していくかが重要であると、コメンテーターの藤さんは話しました。

ひょうたん塾ふりかえり

事務局の元持より、今年度のひょうたん塾の活動報告を行いました。全5回のゼミと野点を行いましたが、町内外問わずたくさんの方にご参加いただき、大槌の魅力を再発見したり、課題を見つめ討議したり、楽しい時間と考える時間がともに充実した1年間でした。何より事務局としては多くの町民と繋がり、ご協力いただきながら今年度の活動を展開できたことが大きな収穫であり、参加者にとっても何かのきっかけになっていると嬉しいですと語りました。

多様性と柔軟さ

後半は、宝来館 代表取締役の岩崎昭子さん、大槌町社会福祉協議会の川端伸哉さん、特定非営利活動法人吉里吉里国 理事長の芳賀正彦さん、大槌町郷土芸能保存団体連合会の中村光高さんの4名の方にお話いただきました。それぞれ独自の専門性を持った活動をされていますが、共通しているのは「自分たちがやらないと」という強い気持ちです。

社協の川端さんは、町民自らがまちづくりに参加しようとする意識をもっと持つべきであると主張します。これから「住民支え合いマップづくり」という活動を開始し、自分の地域を自分たちでどうにかしていけるような地域づくり、人づくりの活動をされるそうです。

お互いのいまを知る

計7団体の活動紹介と対話の時間では、それぞれの活動への思いがひしひしと伝わってきました。各団体の活動の分野は全く違ったものですが、いろんな共通点も見えてきます。例えば、町民自身が動き出さないと復興は始まらない、という危機感を持っているという話は何度も聞くことができました。そして、みんなで集う場、話し合う場が必要だという意見も多いことがわかりました。みんなが大槌のこれからのまちづくりのことを考え、同じような意見を持っていることがわかれば、協力できることももっと増えてくるかもしれません。こういう団体間の意見交換ができる機会も、今後必要になってくると思われます。

一方、宝来館の岩崎さんは、被災地にみんなが戻ってくるためには、しばらくは外の人たちに来てもらわないと成り立たないので、外から来ていただいて、大槌釜石を知ってもらうのが宿の最初の役目だと考え、宿業以外の活動でも実践されています。吉里吉里国の芳賀さんは、大槌町で持続可能な、子供・孫の将来まで続く生業を続けて行くのは、海山川はどうしても必要不可欠であり、きちんとした自然がなければ大槌町の将来はないと考えておられます。40年50年先に住む全ての人の役にたてばよいと思い、植林を始められるそうです。郷土芸能保存団体の中村さんは、郷土芸能やお祭りを通じて、支援への感謝のためや、今後の町の賑わいのために、子供たちにどう伝統芸能を伝えていくかを課題に掲げられています。

分野は全く違いますが、それぞれ地元のこれからのことを考え、強い思いをもたれています。震災以前と以降、震災からの時間の経過でミッションが変わってきています。対応をうまく転換し、柔軟に対応する発想力が今後必要になると藤さんはコメントされました。

町内には他にもさまざまな活動団体があり、それぞれが大槌のまちづくりのためにいろんな活動を行っています。

フォーラムの傍ら、入り口付近ではきむらとしろうじんじんさんと町民によるお茶会と、Alua さんのカフェも出店し、和やかな空気が流れていました。開演前と休憩時間には音楽ライブも。ノリシゲさんの方言を用いた楽曲には、参加者も楽しんでいる様子でした。後半のレポートは、次回ひょうたん塾通信にて！